

価値表現の分極性

尼 寺 義 弘

はじめに

一 価値表現の両極は矛盾の関係にあるのか

二 両極のヘーゲルの解釈について

三 価値形態を展開せしめる真の原動力はなにか

むすび

はじめに

617

価値表現の両極は、いかなる関係にあるのか。両極は価値形態を展開せしめる原動力としての矛盾の関係にあるのか。あるいは相互前提としての反省関係にあるのか。本稿は両極を矛盾するものとみる宮川実、遊部久蔵氏に代表される説を吟味し、両極の真の関係はいかなるものかを検討するものである。そして価値形態を展開させる真の

価値表現の分極性

一四七

618

原動力はなにか、を考察するものである。

本稿における記号・・・は原文の強調、隔字体およびイタリック体を示している。、、、、は私の強調である。

阪 南 論 集 第四卷

一四八

一 価値表現の両極は矛盾の関係にあるのか

価値表現の両極について、これまでに述べられている各論者の主張を掲げてみよう。まず、この両極の関係を発展の原動力としての矛盾とみるデ・イ・ローゼンベルグは次のように言う。

「マルクスは『資本論』のなかで、経済諸現象をまさにそのように、相互的な関連と運動のうちに、すなわち矛盾のたえまない発生と解決のうちに、研究する。商品は冒頭から『ブルジョア社会の経済的細胞形態』として、すなわち、孤立的にではなく、全体の出发点としてとりあげられており、その矛盾のうちに、すなわち使用価値と価値との矛盾のうちに、研究される。そしてこの矛盾は、交換において内的矛盾から外的矛盾に、すなわち相対的価値形態と等価形態との矛盾に、転化する。この矛盾はその解決を、すなわちその運動形態を、貨幣のうちに見いだす。⁽¹⁾」

遊部久蔵氏は次のように言われる。

「リンネルが使用価値として異なる上衣と区別（不等性）の関係に立つことは同時に、価値として同一性（相等性）の關係に立つことを意味する。かかる同一性（相等性）の關係なしにはかの区別の關係もなりたたぬ。ここに（リンネルの上衣との）区別における両契機としての同一性と区別との存在がみとめられる。簡単にいえば区別されたものとしてのリンネルと上衣とは使用価値の面においては不等、価値の面においては相等の關係にある。そしてこ

のような上衣との区別の関係を内に含むものとしてリンネルは自己同一性の立場をもっている。

リンネルと上衣とのかかる関係はまさに区別、しかもそのうちでも単なる差別を超えた対立の関係にあり、ひいては矛盾の関係にあるのである。したがってこれを根拠として全価値形態の展開が可能とされる。⁽²⁾

宮川実氏も次のように言われる。

「絹布の価値表現は、相対的価値形態と等価形態という対立物の統一である。このことを理解することは、価値形態の発展を理解するうえで決定的に重要である。この相対的価値形態と等価形態との矛盾が価値形態を發展させる原動力なのである。」⁽³⁾

吉村達次氏も次のように言われる。

「両形態は対立物の統一として、一個の矛盾を形成する。以下における価値形態の展開はこの矛盾の發展をしめすものにはかならない。」⁽⁴⁾

小林威雄氏も次のように言われる。

「この相対的価値形態と等価形態との矛盾が価値形態の發展をもたらす原動力である。」⁽⁵⁾

堀晋作氏も同様に言われる。

「相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現において、たがいに対立し排除しあう対極をなし、矛盾する関係にある。」⁽⁶⁾

横山正彦編『経済学概論』も同様に言われる。

「同じ商品は、同じ価値表現においては、同時に双方の形態であらわれることはできず、矛盾の関係におかれて⁽⁷⁾いる。」

価値表現の分極性

一四九

619

阪南論集 第四卷

一五〇

620
このように各論者は、両極を「矛盾」とみるか、あるいはその「矛盾」が価値形態を展開させる「根拠」、「原動力」であると言われる。

われわれは、これらの主張の可否を検討するまえに、マルクスがなぜ価値形態を分析したのかをみておこう。

それは、金がその自然的諸属性——その光り輝く色、その比重、その空気中での不酸化性、等々——とともに、あらゆるものと交換しうるという「社会的な自然的属性」⁽⁸⁾をなずもっているのか。何故に金が一般的等価物であり、貨幣であるのか。「この虚偽の仮象の確立」⁽⁹⁾を究明するためである。

金は生れながらにして貨幣であるかのようにみえる。だが、それは仮象であって、すべての商品がそれらの価値を金で相対的に表現するがゆえにのみ、金は貨幣となる。すなわち、諸商品の社会的な共同事業によって、一般的な等価形態の地位を金が社会的に独占しえたがゆえに、貨幣となりえたということである。つまり金が一般的等価物の役割を演ずるのは、すべての他の諸商品が全面的にそれらの価値を金で表示するという価値関係のなかにおい

てのみそうなのである。

だから、一般的な商品としての貨幣商品・金は、それ以外のすべての特殊的な商品があって、はじめて貨幣商品といえるのである。一方に、貨幣商品がくれば、必ず他方に、非貨幣商品が対応しなければならないという関係である。このことは、すべての商品にたいして、同時に直接的交換可能性の形態を与えることができないとして、次のようにマルクスが述べていることから明らかである。

「人は、一般的直接的交換可能性の形態について、それが、一磁極の陽性が他の磁極の陰性と不可分離なのと同様に、非直接的な交換可能性の形態と不可分離な、一つの対立的な商品形態であることを、事実上けっして観取しない。だから人は、すべての労働者を資本家たらしめうるかに空想できると同様に、すべての商品に対し同時

に直接的な交換可能性の極印を押しうるかに空想できるのである。だが事實上、一般的な相対的価値形態と一般的等価値形態とは諸商品の同じ社会的形態の、対立的な、相互に前提し、かつ相互に反発する、二極である。¹⁰⁾

だから貨幣商品と非貨幣商品とは、切り離しえないものであり、互いに補足し、依存しあう関係にあり、商品生産が続くかぎり貫徹する均衡関係である。すなわち、貨幣商品のみでは商品社会は成立しない。もし成立しようとすれば、すべてのキリスト教徒を法王にするというような妄想である。さらに、貨幣商品をなくして特殊な商品だけでも商品社会は成立しない。もし成立可能とすれば、法王をなくして、しかもキリスト教を存続させることにひたしい妄想である。このようにマルクスは述べている。

さて、マルクスは「虚偽の仮象」の正体をあばきだすために、貨幣形態から遡及してその原基形態——もっとも簡単な、もっとも未展開な形態である、単純な価値形態——において「貨幣の秘密」¹¹⁾を発見したのである。つまり等価値形態の謎の発見である。

単純な価値形態は、一商品の価値が他の一商品の使用価値で表現される価値形態である。

一商品の価値は、如何にして表現されるか。

価値表現の根本的メカニズムである「廻り道」¹²⁾は、相対的価値形態にある商品が、能動的に他の商品を自分に等置することによって、他の商品を価値物たらしめ、経済的形態規定性を与えたうえで、その商品によってみづからの価値を表現することにある。

このばあい重要なことは、価値表現の手段となる商品、つまり等価値形態の商品は、その商品体そのものが価値物としての定在形態（直接的交換可能性の形態）にあることである。すなわち、商品の自然的形態が価値形態になっているのである。

価値表現の分極性

一五二

阪南論集 第四卷

一五二

「等価値形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生れながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている。なるほど、このことは、ただリンネル商品が等価値物としての上着商品に関係している価値関係のなかで認められているだけである。しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価値形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらにもっているように見える。それだからこそ、等価値形態の謎性が生ずるのであって、この謎性が経済学者のブルジョア的に粗雑な眼を驚かすのは、やっと、等価値形態が貨幣において彼の眼のまえに完成して現われるときである。」¹³⁾

このように等価値形態とは、商品のあるがままの自然的形態が直接に社会的形態として、他の商品のための価値形態として意義をもつということである。そして等価値形態のこの独自の性格は「その物の社会的な自然的属性として、その物に生まれつきそなわる一属性として現われる。」¹⁴⁾このことから、金の謎的性質——その自然的諸属性とともに、すべての商品と直接的に交換しようという社会的性質——も生ずるのである。

だが等価値形態の独自の性格は、相対的価値形態にある商品が、自分自身の価値の現象形態として、他の商品を等価値形態にとる、という関係においてのみ生ずるのである。

「上着が価値体であるのは、リンネルが一定の仕方得上着と関係するからであり、またそのかぎりにおいてだけである。上着の等価値存在は、いわばリンネルの一つの反省規定にはかならない。しかし、それはまさに逆にみえる。」¹⁵⁾

「商品の自然的形態が価値形態となる。だがよく注意せよ。この転倒（*Quidproquo*）が一商品 B（上着や小麦

や鉄など)にとって生ずるのは、ただ任意の他の一商品A(リンネルなど)が商品Bととりむすぶ価値関係の内部でのみ、こうした連関の内部でのみである。」¹⁰⁶

すなわち、商品の価値は商品世界における社会的単位である。そして商品そのものは自然的形態を表示するだけであるから、社会的なものである自分の価値を自身の体で表現できない。だから商品の価値は他の商品との関係においてのみ対象的な、眼にみえる姿をとりうるのである。つまり価値の形態である。そのばあい価値を表現すべき商品は、他商品を自分の価値の鏡とし、その鏡によって自身の価値を表現するのである。

だから価値表現を構成する二商品は、一商品に対して、必ず他の商品が対応しなければならぬという関係、もちつたれつ、の関係にある。この場合にのみ等価値形態の独自の性格も生まれるのである。

このように、相対的価値形態と等価値形態とは、貨幣商品と非貨幣商品との関係と同じであり、互いに依存しあい、補足しあつてのみ存在することができる。一商品が相対的価値形態にあるということは、同時に、必ず、他の一商品が等価値形態にあることを意味し、一商品が等価値形態にあるということは、同時に、必ず、他の一商品によって自分の価値を表現しているということの意味している。このように相対的価値形態と等価値形態とは、相関関係にあるのであつて、けつして運動の原動力としての矛盾の関係、闘争関係にあるのではない。両形態は、価値関係にある二商品の形態上の区別であり、価値表現を構成するモメントである。この両形態の相互関係について『資本論』は明快に述べている。

「相対的価値形態と等価値形態とは、同じ価値表現の、相互に属しあい、相互に制約しあう不可分なモメントであるが、同時にまた、相互に排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。」¹⁰⁷

「両形態は、事実上、同一の相対的価値表現の単なるモメント、相互に制約されあつて規定であるが、しか

価値表現の分極性

一五三

阪南論集 第四卷

一五四

624

し、二つの等置された商品極のうえに分極的に属している。」¹⁰⁸

「リンネルの相対的価値形態は、何か別の一商品がリンネルに対して等価値形態にある、ということ的前提している。」¹⁰⁹

このように両極を構成する二商品の関係は、互いに不可分離なモメントであり、相互に相手を前提すること、すなわち、相互に補足し、反照しあう関係である。

これは永遠に補足し、依存しあう均衡関係であり、同一の関係を維持しつづけるものである。つまり価値関係という同じ一つの本質の区別であり、その両極は相手なしにはけつしてありえない相関関係である。この関係は、たとえば裏と表、上と下、男と女、などの現実の具体的な事態に照応したものである。

マルクスは、この同一の関係、相関関係を『ヘーゲル法哲学の批判』のなかで、次のように述べている。

「北極と南極とは二つの極であり、その本質は同一である。同じように女性と男性とは、両者とも一つの類であり、一つの本質であり、人間の本質である。北と南は、一つの本質の対立した規定である。一つの本質の、最高の発展における区別である。」¹¹⁰

このように相互に依存しあい、補足しあう関係、互いに相手なしにありえない関係は、「二つの本質」の最高の区別である。この関係は、均衡関係、同一の関係を破壊するものである矛盾では、けつしてない。

発展の原動力である矛盾は「二つの本質」の直接的関係であり、和解することのできない闘争関係である。

「現実の両極は、それらがまさに現実的な両極であるがゆえに、相互に媒介されえない。しかしまた、それらはなんらの媒介も必要としない。なぜなら、それらは対立する本質であるから。」¹¹¹

「真の現実的な極は、極と非極であり、人類と非人類であろう。」¹¹²

このように、矛盾は妥協も調和も許されない「二つの異なる本質」の闘争関係である。

さて、これまでわれわれは、価値表現の両極がなにゆえに相互に依存し、補足しあう相関関係であるのかをみてきた。それは価値関係という同じ一つの、本質の最高の形態上の区別であるからであった。以上のことから、両極の矛盾が価値形態を展開させる「根拠」、「原動力」であるとする説の誤りが明らかとなった。

ところで、はじめに掲げた両極を矛盾とする諸説は、両極が「相互に排除しあう、または対立する両端、すなわち両極である。」とマルクスの述べていることの意味を、発展の原動力としての矛盾の関係、闘争関係と理解されていることからくるのかもしれない。

まず両極が「相互に排除しあう」ということは矛盾を意味するものであろうか。

だが、ここで「排除」とマルクスの述べているのは、対立的な形態である相対的価値形態と等価形態とが、けっして一つの商品のうちに共存しないで、二つの異なる商品のうちに配分されることである。すなわち、

「相対的価値形態と等価形態とは、分極的な対立をなしているから、あるいは、不可分な一對をなしているのと同様にたえず相排除しているから、(一)一つの商品は、他の商品がそれと対立した形態になれば、一方の形態にありえない、(二)一つの商品が一方の形態にあるとき、その商品は同時に、同じ価値表現の内部で他方の形態にありえない。」²³

「同じ商品が同じ価値表現において、同時に双方の形態であらわれることはできない。この両形態は、むしろ分極的に排除しあうのである。」²⁴

それゆえに、

「この両極は、つねに、価値表現によってたがいに関係させられる相異なる商品のうに配分される。」²⁵

価値表現の分極性

一五五

625

阪南論集 第四卷

一五六

626

だから、マルクスは、両極が異なる二商品に配分されることを述べたのであり、一商品が同時に両形態をとりえないことを「排除しあう」と表現したのである。

そして両極は全く異なる役割を演ずるのであるから、もしも一商品が同じ価値表現において、同時に相対的価値形態でも等価形態でもあるとすれば、まさにそれは論理的矛盾でもあろう。

これは、方向における北と南の関係と同じである。つまり北は南なしにありえない。しかし北は南ではない。その意味で北は南を「排除」している。これは、方向という一つの、本質の区別であり、けっして北と南は矛盾するものではない。それはつねに補足し、共存している関係である。

発展の原動力としての矛盾は、異なる二つの、本質の直接的関係であり、古きものと新しきものとの闘争関係である。したがってその闘争関係からは、必ずその矛盾を解決するための新しいものが生みだされる。

ところが、価値表現の両極の関係は、すでに述べたように相互前提の関係にあるのだから、何ら新しいものは生まれまいし、また生まれようがないのである。

ところで、宮川氏等は両極を「矛盾」と考えられ、その「矛盾」が価値形態を展開させる「原動力」と言われている。ところが、奇妙なことに氏等はその点について何ら言及されていない。価値形態の展開については、氏等はマルクスにしたがって価値表現の不十分に、その「原動力」を求められているのである。

たとえば宮川実氏は言われる。

「生産力が発展し、交換される生産物の種類と分量がふえるにしたがって、商品も価値もしだいに概念に近づいていった。そして価値形態も、簡単な価値形態では不十分になり、一種類の商品の価値が他の多くの種類の商品によって表現されるようになった。」²⁶

小林威雄氏も言われる。

「簡単な価値形態は、価値形態としては不十分である。……これでは、同等な抽象的・人間的労働の対象化である価値の社会的な性格は十分にいい表わされていない。……」

そこで、この簡単な価値形態は、より完全な形態に移行する。²⁸⁾
堀晋作氏も同様に言われる。

「簡単な価値形態は、商品Aを商品Bにのみ対置させるにとどまり、商品A以外のすべての商品との質的同等性と量的比率性を表示するものではないという理由によって、価値形態としていまだ不十分である。……したがって、商品Aの単独な価値表現は、商品Aと異なる諸商品種類とむすばれる簡単な価値諸表現の系列に転化し発展する。」²⁹⁾

このように、宮川氏等は「価値形態を發展させる原動力」を、両極の矛盾にではなく、価値表現の不充分さに求められている。

だから、両極は矛盾するものでなく、それが価値形態の展開の「原動力」でありえないことを、氏等みづから認められているのである。

以上のように、価値表現の両極は、發展の原動力としての矛盾の関係にあるのではなくて、抽象的対立としての、つまり現実の対立物の一側面としての相互前提の関係にあるのである。

627

価値表現の分極性

一五七

ところで、マルクスは「一般的な価値形態」で「価値形態一般が發展するのと同じ程度で、その両極たる相対的価値形態と等価値態との対立も發展する」と述べ、A、B、Cの各価値形態における両極——この両極の関係は、どの価値形態においても普遍的に妥当するものであり、対立物の一側面である、相補足し、反照しあう関係で

阪南論集 第四卷

一五八

628
あり、永遠の均衡関係である。——が特定の商品に固定していくこと、すなわち、一商品が相対的価値形態にあるか、等価値態にあるか、という関係が、だんだんと固定していくこと、つまり容易に取りかえられないこと、について論じている。

これについて、宮川氏は「価値表現の二つの要因のこの矛盾は、価値形態が發展するにつれてますますはげしくなる。」³⁰⁾としている。

だが、マルクスが「価値表現の双方のモメントのこの分極的な対立は、一般に価値形態が發展し、あるいは完成するのと同じ程度で、發展し、硬化するのである。」³¹⁾と述べ、われわれが、すでに論じてきた両極の関係からいって、氏の主張は誤解を示すものである。

- (1) デ・イ・ローゼンベルグ『資本論注解』I 五六―五七頁。副島・宇高訳 青木書店 一九六五年。
- (2) 遊部久蔵『マルクス価値論の根本問題』一七六頁。新潮社 昭和二十四年。
- (3) 宮川実『資本論講義』I 九四―九五頁。青木書店 一九六八年。
- (4) 吉村達次「商品」宇佐美誠次郎他編『マルクス経済学体系』I 所収 同書 三四―三五頁。有斐閣 一九六八年。
- (5) 小林威雄『貨幣の基礎理論』八七頁。青木書店 一九六九年。
- (6) 堀晋作「商品」『経済』一九六九年 五月号 所収 同書 一五五頁。新日本出版社。
- (7) 横山正彦編『経済学概論』七六頁。有斐閣双書 昭和四十三年。
- (8) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 98. Dietz Verlag Berlin, 1961.
- (9) カール・マルクス『資本論』第一巻八初版 復刻版V 三一頁。青木書店 一九五九年。以下『資本論』初版と略す。
- (10) マルクス『資本論』初版 二二頁。
- (11) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 55. 同前『資本論』初版 二〇頁。
- (12) K. Marx, *Das Kapital*, a.a.O., SS. 62―63.

- (14) マルクス『資本論』初版 七七五頁。
- (15) マルクス 同書 一二三頁。
- (16) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 61.
- (17) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 53.
- (18) マルクス『資本論』初版 一二頁。
- (19) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 54.
- (20) K. Marx, *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie*, Marx-Engels Werke, Bd. I, S. 293. Dietz Verlag Berlin, 1970.
- (21) K. Marx, *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie*, a. a. O., S. 292.
- (22) K. Marx, *Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie*, a. a. O., S. 293.
- (23) マルクス『資本論』初版 七八〇―七八一頁。
- (24) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 54.
- (25) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 53.
- (26) 宮川実『資本論講義』I 一〇七―一〇八頁。
- (27) 小林威雄『貨幣の基礎理論』九七―九八頁。
- (28) 堀晋作「商品」『経済』一九六九年 五月号 所収 同書 一五八頁。
- (29) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 73.
- (30) 宮川実『資本論講義』I 一一八頁。
- (31) マルクス『資本論』初版 七八一頁。

価値表現の分極性

一五九

629

阪南論集 第四卷

一六〇

630

二 両極のヘーゲルの解釈について

ところで、古いことであるが遊部久蔵氏は、宮川実氏等と同じように、両極の関係を「価値形態の展開の『規定・的な根源』⁽¹⁾」としての矛盾と解されている。氏は『資本論』第一巻、第一編「第一章全体が本質論によって基礎づけられている」⁽²⁾として、ヘーゲルの『論理学』の「本質論」に依りながら説明される。

「商品の二要因としての使用価値と価値とを厳密な意味での対立物として解することが必要である。使用価値と価値とは商品の相異なる二つの側面でもなければ、二つの部分でもない。一個同一なものとしての商品が全体として使用価値であるとともにまた全体として価値なのである。使用価値と価値とは相互に排擠し合い、否定し合うと同時に相互に前提し合い、肯定し合っているのであって、対立とは単なる区別ではない。同一性をふくんだ区別であり、対立し合う両者は相互に固有の必然的の他者たる関係にあるのである。このような関係にあってはじめて使用価値と価値との間に矛盾が生じ、かのいわゆる『商品の自己運動』が生じる。この第一節とかぎらず、第一章全体の理解の深淺は、かの二要因あるいは二重の労働、あるいは価値表現の両極をこのような厳密な意味における対立として絶対・対・絶・命・の・ギリ・ギリ・のところ、でとらえるかいかにかかっているともいえよう。」⁽³⁾

さらに、氏は両極について言われる。

「リンネルが使用価値として異なる上衣と区別（不等性）の関係に立つことは同時に、価値として同一性（相等性）の関係に立つことを意味する。かかる同一性（相等性）の関係なしにはかの区別の関係もなりたたぬ。ここに（リンネルの上衣との）区別における両契機としての同一性と区別との存在がみとめられる。簡単にいえば区別された

ものとしてのリンネルと上衣とは使用価値の面においては不等、価値の面においては相等の関係にある。そしてこのような上衣との区別の関係を内に含むものとしてリンネルは自己同一性の立場をもっている。

リンネルと上衣とのかかる関係はまさに区別、しかもそのうちでも単なる差別を超えた対立の関係にあり、ひいては矛盾の関係にあるのである。したがってこれを根拠として全価値形態の展開が可能とされる。蓋し『かかる矛盾の矛盾の定立と同時的なそれが解決とが、正に運動なのである。』から⁽⁴⁾

遊部氏は、右のようにヘーゲルが「本質論」で述べている区別の諸規定を価値表現の両極の關係に援用される。

すなわち氏はヘーゲルの「差別」(Verschiedenheit) → 「対立」(Gegensatz) → 「矛盾」(Widerspruch) という認識の進展にならって、両極を最終的に矛盾するものと理解され、その矛盾が価値形態の展開の「根拠」、⁽⁴⁾「規定の根源」であるとされている。

われわれはこうした氏の主張が、妥当なものかどうかを検討するまえに、ヘーゲルが「本質論」の区別で論じていることを考察しよう。

ヘーゲルが「本質論」で述べていることは、相互前提の関係である反省関係である。そこで論じられていることは、すべてのものが自分の対立物を持ち、この対立物と区別されながら、しかもこの対立物によってのみ自分を規定されているという関係である。たとえば「同一性」と「区別」、「肯定的なもの」と「否定的なもの」、「本質」と「現象」というように、対立的なカテゴリーの吟味である。対立物の双方の規定は、それぞれが自立しようとするバラバラになり、自分自身で存立しえない関係にあり、互いに切り離すことができない。したがってそれらの規定は相互に浸透しあっており、それぞれが即自的に自己の他者である。

「一般に対立においては、区別されたものは自分にたいして単にある他物を持つのでなく、自己に固有の他者を

価値表現の分極性

一六一

631

阪南論集 第四卷

一六二

632

持つのである。……両者は本質的な相互関係のうちにあり、その一方は、それが他方を自分から排除し、しかもまさにそのことによって他方に關係するかぎりにおいてのみ存在するのである。⁽⁵⁾

このように、物は自分で自身を規定することができないで、自分の対立物によってのみ自分自身を規定されること、そして同時に、自分は自分の対立物そのものではない、という意味で対立物を「排除」しているのである。これが「本質論」でとりあげられていることである。

そこで同一性 (Identität) と区別 (Unterschied) との關係をみていこう。同一性は物が多様な諸現象をとりながらも、つねに深部をつらぬいている本質的なものであり、区別は一見、自立しているかにみえる諸現象の独立性を失わしめること、つまり觀念化することによって、同一なもの一つのモメントとして關係づけ、区別づけることである。

だから同一性と区別は、相互に媒介されあっており、反省關係にある。つまり「同一性は同時に關係であり、しかも否定的な自己關係、言いかえれば、自分自身から自己を区別するものである」⁽⁶⁾。

ヘーゲルは同一性に対して右のような關係にある区別について、そのもっとも低い認識の段階である差別から対立へ、対立から矛盾へと論を進めている。

差別は直接的な区別であり、区別されたもののそれぞれは独立して存在しており、他のものによって媒介されおらず互いに無關心の關係である。だから両者は第三者の立場からの比較によって關係づけられねばならない。その關係づけられる同一なものが「同等性」(Gleichheit) であり、異なるものが「不等性」(Ungleichheit) である。

この關係は、たとえば、一見すると全く偶然的で、相対的なもののようにみえる交換価値から価値の実体を析出

することにあてはまる。すなわち異なる二商品が、なにゆえに等置されているのか、という分析者の立場から、両商品には共通なもの、同一の実体がなければならないという分析である。さらにマルクスが商品生産の社会では、私的労働が直接的に社会的形態をとりえず、あらゆる労働の具体性を捨象された抽象的人間労働という形態ではじめて社会的労働となりうること、つまり抽象的人間労働が社会的関係の絆となることに關して、次のように述べているのもこの関係である。

「私的諸労働の社会的形態は、同・等・な・労働としてのそれら相互の関係であり、したがって全く異なる諸労働の同・等・性 (Gleichheit) は、それらの不・等・性 (Ungleichheit) の捨象のうちにありうるのみであるのだから——すべての人間労働がそれらの内容とそれらの活動の仕方とのいかにかわらず事実上そうであるところの、人間的な労働一般、人間的な労働力の支出としてのそれらの相互の関係である。」⁽⁷⁾

だから遊部氏が「リンネルが使用価値として異なる上衣と区別 (不・等・性) の関係に立つことは同時に、価値として同一性 (相・等・性) の関係に立つことを意味する。」⁽⁸⁾ということは、商品とは何か、を分析する出発点にあたるものであって、けっして両極の関係を規定づけるものではない。

以上のように、外的な区別として差別されたものは、比較の立場より同等性と不等性との関係におかれる。だが、それらの規定は互いに真のモメントとなっておらず、互いに無関心な他者であった。対立においては、この両規定は一方は他方なしには考えられない関係、つまり相互媒介の関係におかれ、認識は進展する。

「自己に即した区別は本質的な区別、肯定的なものと否定的なものである。……両者の各々は、それが他者でない程度に応じて独立的なものであるから、各々は他者のうちに反映し、他者があるかぎりにおいてのみ存在する。したがって本質の区別は対立 (Entgegensetzung) であり、区別されたものは自己にたいして他者一般をではなく、

価値表現の分極性

一六三

阪南論集 第四卷

一六四

自己に固有の他者を持っている。言いかえれば、一方は他方との関係のうち、のみ自己の規定を持ち、他方へ反省しているかぎりにおいてのみ自己へ反省しているのであって、他方またそうである。つまり、各々は他者に固有の他者である。」⁽⁸⁾

このように、本質的な区別は肯定的なものと否定的なものの対立であり、両者は本質的に制約しあっており、相互関係においてのみ存在しうるのである。そして両者は互いに他者を予想し、それを自己のうちに包含しているということであり、けっして矛盾するものではない。これは現実の事態に照応した正しい見地である。たとえば、磁石の北極と南極、電気のプラスとマイナス、右と左、上と下、などである。磁石の北極といえば南極を予想し、磁石そのものの磁性を意味するのである。つまり、北極と南極は磁性という一つの本質の区別である。

そして価値表現の両極も、このことが妥当する。そして、この両極は、遊部氏も引用されているカウツキーの附加語「あたかも一つの直線の両端のような」⁽⁹⁾関係である。つまり、直線の一方の端点は必ず、他方の端点を予想する関係にあり、他方がなければ一方も自立して存在しえない関係である。

ところが、ヘーゲルは対立物の相互依存と、その対立物を構成する一つのモメントの独立性とは和解しがたいとして、対立物の各々のモメントは矛盾するものであるとしている。

「自立的な反省規定は、それが他の規定を内部に含み、そのために自立的であるのと同じの見地において、他の規定を排除するのであるから、それはその自立性のうちにあって、自分自身の自立性を自分から排除しているのである。なぜなら、この自立性は、他の規定を自分のうちに含み、その点で全く外的存在に対する関係をもたない点にあるが、しかしまた同様に直接的に、自分自身であって自分の否定的な規定を自分から排除する点にあるものであるからである。この意味で、この自立的な反省規定は矛盾である。」⁽¹⁰⁾

このように対立の関係にある各々の規定は、相互に制約しあっており、他の規定なしにはありえない。しかし、けっして自分は他の規定ではなくて、他の規定を自分から排除している。その意味で、自分自身で自立できないから矛盾である、とヘーゲルはいう。

このことは、たとえば、つぎのことと同様である。すなわち磁石の北極は南極なしにはありえないし、南極は北極なしにはありえない。しかし、北極はけっして南極でない。だから北極は南極を排除している。つまり各々の規定は相互制約と相互排除の関係にあるから、自立しえず矛盾であるという。だが現実に北極と南極とは矛盾することなく存在している。思惟と存在、すなわち認識と具体的事物を区別できなかったヘーゲルは、認識における矛盾を現実の事物そのものの矛盾と考えたのである。¹⁰⁾

遊部氏はヘーゲルのこの誤りを次のように説明される。

「自立的な反省規定は他の規定をその内に包含することによってそれは自立的であると同時に、それは他の規定を排除することによってそれはその自立性の内において自己自身の自立性を排除している。ここにおいては他者の包含と排除とは両立しない。かかる自立的な反省規定が矛盾である。」¹¹⁾

このように、氏はヘーゲルの誤りをそのまま認められている。そして、この誤ったヘーゲルを両極に適用され、両極の矛盾が価値形態の展開の「根拠」、「規定的根源」であるとされるのである。

635

だが、すでに述べたように、両極は矛盾するものではなく、価値関係という一つの本質の区別であり、本質的に制約しあっている反省関係にあるのである。だから、氏の主張を根拠づけるための『反デューリング論』からの引用、「矛盾をたえず定立しながら同時に解決してゆくことが、すなわち運動なのである」¹²⁾は全く妥当しない引用である。

価値表現の分極性

一六五

阪南論集 第四卷

一六六

636

エンゲルスはその箇所では形而上学的な考え方は、けっして運動をとらえないことを述べている。すなわち、「運動そのものが一つの矛盾である。すでに単純な力学的な場所の移動でさえ、一つの物体が同一の瞬間に一つの場所にあるながら同時に別の場所にあるということ、同一の場所にあるとともにそこにはないということによって、はじめてこれをおこなうことができるのである」¹³⁾

右のことを価値表現についていうならば、矛盾は同じ、商品が同じ、価値表現において、同時に、双方の形態をとり、えたばあいにのみいいうるのである。ところが価値表現の双方の形態は「分極的に排除」しあっており、二商品は各々の極に配分されているのである。だから、両極は運動の源泉である矛盾とはけっしてなりえないのである。

- ⑭ このことについては、松村一人「現実的矛盾について」、「ヘーゲルの論理学」所収 勁草書房 一九六九年、および甘粕石介「商品の矛盾の理解について」、「経済学雑誌」第二五巻、第五号所収、参照。
- (1) 遊部久蔵『マルクス価値論の根本問題』一八八頁。
 - (2) 遊部久蔵『価値論と史的唯物論』一一二頁。弘文堂 昭和二五年。
 - (3) 遊部久蔵「商品論」講座『資本論の解明』第一分冊所収 同書 一九九頁。青木書店 一九五一年。
 - (4) 遊部久蔵『マルクス価値論の根本問題』一七六—一七七頁。
 - (5) Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *System der Philosophie. Erster Teil. Die Logik*. Hegel-Sämtliche Werke, Bd. 8, Hrsg. von H. Glockner, S. 279. Friedrich Frommann Verlag, 1964. 松村一人訳『小論理学』下巻 三二—三三頁。岩波文庫 昭和四十一年。
 - (6) G. W. F. Hegel, *Die Logik*, a. a. O., S. 271. 松村訳『小論理学』下巻 一三三頁。
 - (7) マルクス『資本論』初版 三三頁。
 - (8) G. W. F. Hegel, *Die Logik*, a. a. O., S. 276. 松村訳『小論理学』下巻 一三八頁。
 - (9) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, Herausgegeben von Karl Kautsky, S. 16. Dietz Nachf. Berlin, 1928.

- (10) G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik. Erster Teil. Die objektive Logik*. Hegel-Sämtliche Werke, Bd. 4, Hrsg. von H. Glockner, S. 535. 武市健人訳『大論理学』中巻 六五—六六頁。岩波書店 昭和三十八年。
- (11) 遊部久蔵『マルクス価値論の根本問題』一六二頁。
- (12) (13) F. Engels, *Anti-Dühring*, M-F. Werke, Bd. 20, S. 112. Dietz Verlag Berlin, 1968.

三 価値形態を展開せしめる真の原動力はなにか

われわれは、すでに価値表現の両極の矛盾が、価値形態の展開の「原動力」、「規定的根源」であると諸説を検討した。それらの説は相互前提としての反省関係を矛盾とみることに於いて根本的な誤りであった。

そうとするならば価値形態の展開の真の原動力は何であるのか。それを検討しよう。

商品の価値は自然的なものではなく、商品世界における社会的なものであるから、それは一商品と他商品との関係においてのみ対象的な形態をとりうる。

単純な価値形態（以下において「第一形態」と呼ぶこととする）は、一商品と他の一商品との関係であり、価値形態一般である。それは、一般に価値形態であるために必要な規定以外のものを含まず、最も単純な価値形態である。マルクスは第一形態で両極の関係、相対的価値形態の内実、等価形態の独自性などを二商品の価値関係において純粋な姿で考察している。

ところで価値は社会的なものであり、あらゆるものと交換可能な普遍的なものである。だから、他のあらゆる商品に対して質的同等性、および量的比率性を表示しなければならない。

ところが、第一形態、たとえば $20\text{H. v. N.} = 1\text{L.}$ という価値方程式において、リンネルの価

価値表現の分極性

一六七

638
値および価値量は、上着という商品で表現されているだけである。さらに上着も、ただ一つの商品リンネルに対して等価形態となっているだけであって、すべての商品に対して等価形態となっていない。⁽¹⁾

だからこの方程式は「明らかに、商品の価値を全く限られたもの、一面的なものとして表現するだけである。」⁽¹⁾したがって、この形態は価値表現の形態としては、価値概念に対して明らかに「不充分」である。⁽²⁾ここに価値概念とその表現形態（定在様式）との矛盾「不一致」がある。マルクスは述べている。

「価値としてリンネルは他のすべての商品と同一である。だから、リンネルの価値形態は、リンネルを他のすべての商品に対する質的同等性および量的比率性の関係におくところの一つの形態でなければならない。」⁽³⁾

「第一形態、 $20\text{H. v. N.} = 1\text{L.}$ では、これらの二つの商品が一定の量的比率で交換されうるということは、偶然的な事実でありうる。」⁽⁴⁾

このように、ここでは質的、量的に二つの方面からみて第一形態は価値の形態としては不充分であるから、より完全に価値を表現する形態へ移行せざるをえない不可避性を示したものである。だが不可避性だけでは、第一形態の矛盾を解決する拡大された価値形態（以下において「第二形態」と呼ぶこととする）へ移行できない。第一形態が潜在的に第二形態を含む可能性、つまり第二形態への準備がなければならぬ。それは何であろうか。

第一形態は、一商品の価値がただ一つ他商品で表現される形態であるが、その等価形態の商品が「どんな種類のものであるか、上着や鉄や小麦などのどれであるかは、まったくどうでもよいのである。」⁽⁵⁾なぜなら社会的なものである価値を表現するためには、どんな商品を等価形態にとってもよいからである。つまり「商品Aが他のあれこれの商品種類と価値関係をむすぶのに応じて、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。商品Aの可能な価値表現の数は、ただ商品Aとは異なる商品種類の数によって制限されているだけである。それゆ

え、商品Aの個別的な価値表現は、商品Aのいろいろな単純な価値表現のいくらかでも引き伸ばせる系列に転化する⁽⁶⁾のである」。

これは、等価形態にはどのような商品をもってきてもよく、「個別的な価値形態はおのづからもっと完全な形態に移行する⁽⁷⁾」可能性、準備を示すものである。

以上のように、第一形態はその内部に第二形態へ移行しうる可能性と移行せざるをえない不可避性をもって⁽⁸⁾いる。このことは、第一形態の否定的理解を示すものであって、同時に、第二形態の必然性、つまり肯定的理解を示すものである。これは第一形態と第二形態という互いに両立しえない「二つの本質」の闘争関係の結果であり、古いものにとつてかわって、新しいものが生み出されざるをえないことを示している。

かくして第二形態は、第一形態の矛盾を解決している。すなわち第二形態では、一商品の価値は商品世界のすべての他商品で表現されている。したがって、「この価値そのものが、はじめて真に無差別な人間的労働の凝固としてあらわれる⁽⁸⁾」。

「それゆえ、いまではリンネルはその価値形態によって、ただ一つの他の商品種類にたいしてだけでなく、商品世界にたいして社会的関係をむすんでいる。商品としては、リンネルはこの世界の市民である。それと同時に、商品価値の表現の系列が無限だということのうちに、商品価値は、それがそこであらわれる使用価値の特殊の形態には無関心だということが示されているのである⁽⁹⁾」。

さらに価値の量的関係は、一商品の価値が無数の商品で表示されても同等な大きさであるのだから「交換が商品の価値量を規制するのではなく、逆に商品の価値量が商品の交換比率を規制するのだ、ということが明らかになる⁽¹⁰⁾」。

価値表現の分極性

一六九

阪南論集 第四巻

一七〇

640

このことは第二形態の肯定的理解を述べたものであり、第一形態の矛盾を解決したものである。

ところで、第二形態はつぎのような欠陥をもっている。

第一に、新たな商品が出現することに、表示系列が延長されるがゆえに、永遠に「未完成⁽¹¹⁾」である。

第二に、一商品の価値がすべての他の商品でバラバラに表現されるから、それは「雑然たる寄木細工⁽¹²⁾」をなしている。

第三に、どの商品もこの第二形態で表現されるから、「各商品の相対的価値形態は、他の各商品の相対的価値形態とは異なる価値表現の無限の系列である⁽¹³⁾」。

以上の第二形態の三つの欠陥は、それに照応する特殊な等価形態に反映する。

「各個の商品種類の自然的形態が、無数の他の特殊な等価形態とならんで一つの特殊な等価形態なのだから、およそただそれぞれが互いに他を排除する制限された等価形態があるだけである⁽¹⁴⁾」。

「人間的労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにあの特殊な諸現象形態の総範囲のうちにもっている。しかし、そこでは人間的労働は統一的な現象形態をもってはいないのである⁽¹⁵⁾」。

したがって、「諸商品の共通な価値表現はいずれも直接的に排除されている⁽¹⁶⁾」だから第二形態は価値を表現するための単純性と統一性がなく、同質、同等で量的にのみ異なる抽象的人間労働という価値の本性・概念にとって不十分な形態である。

「物質的に全く異なる労働生産物は、同一の、同等な人間的労働の物的表現として表示されることなしには、完成した商品形態をとることはできない。したがってまた、交換過程において商品として機能することもできない。すなわち、完成した商品形態を受けとるためには、それらの労働生産物は統一的な、一般的な相対的価値形態を受

けとらねばならない。」¹⁷⁷

それゆえに、第二形態は以上の三つの欠陥、不充分さ、を根本的に解決する、より一層、完全な価値表現に不可避免的に移行せざるをえないことを示している。

だが、可能性の方はどうかであろうか。

それは、一商品の価値の他のすべての商品による表現である第二形態が「逆の關係」¹⁷⁸で、潜在的により高次な形態を含んでいることにある。つまり第二形態は第三のより完全な形態の即自である。このことは、第三形態（一般価値形態を「第三形態」と呼ぶこととする）へ移行しうる可能性、準備を示している。

以上により、第二形態はその内部に第三形態へ移行しうる可能性と移行せざるをえない不可避性¹⁷⁹とをもっている。これは第二形態の否定的理解を示すものであって、同時に、第三形態の必然性、肯定的理解を示すものである。このように不完全な価値表現である第二形態を、第三形態へ押し進めるところの矛盾は、第二形態を不充分的な価値表現として否定しているところの第三形態を、第二形態自身が自分のうちに即自的に含んでいることにある。その矛盾は第二形態がたんに肯定的なものでなく、それ自身のうちにその否定者である第三形態を含んでいること、つまり、第二形態と第三形態という互いに両立しえない「二つの本質」の闘争關係にある。そしてその結果、古いものにとってかわって、新しいものが古いもののなから生み出されざるをえないことを示している。

第三形態は第二形態の不充分さ、否定的側面を解決している。すなわち第三形態は、すべての商品の価値が唯一つの商品で表現されるから単純な、統一的な価値表現である。しかし、それは第一形態そのものではなくて、否定の否定の法則による、より高い段階での第一形態への復帰である。マルクスは述べている。

「すべての商品は、リンネルという物質によるそれらの共同的な価値表現によって、みづからを交換価値として

価値表現の分極性

一七一

642

阪南論集 第四卷

一七二

それら自身の使用価値から区別し、同時に価値量として相互に關係する。すなわち質的に等置しあい、量的に比較しあう。この統一的な相対的価値表現においてはじめて、それらすべての商品が相互に価値として現われ、したがってまたそれらの商品の価値がはじめて、その価値に照応する交換価値としての現象形態を得るのである。¹⁸⁰

「ある商品の価値形態、すなわちリンネルによるその商品の価値の表現は、いまやその商品を価値として、使用対象としてのそれ自身の定在から、すなわちそれ自身の自然的形態から区別するのみならず、同時に、その商品を価値として、すべての他の商品に、リンネルと同等なものとしてのすべての商品に關係させる。だからその商品は、この価値形態において、一般的な、社会的な形態をとるのである。」

価値形態が、その一般的な性質によって、はじめて価値概念に照応する。価値形態は、諸商品が無区別の、同様な種類の人間の労働のたんなる凝固物として、すなわち同一の労働実体の物的表現として、相互に現われあうところの形態でなければならなかった。このことは今や達成されている。というのは、商品はすべて同一の労働の、リンネルに含まれている労働の物質化として、あるいは労働の同一の物質化として、すなわちリンネルとして、表現されているからである。このようにして、すべての商品が質的に等置されている。

それと同時に、すべての商品が量的に比較されている。あるいは一定の価値量として相互に表示されている。¹⁸¹

かくして、第三形態は社会的実体としての、同質、同等な抽象的人間労働の体化物である価値を完全に表現する形態であることが明らかとなった。すなわち第三形態は「価値概念」に全くふさわしい価値表現の形態である。

さて第三形態の一般的等価形態に位置する商品が、一つの独自の商品に究極的に癒着すると、その商品は貨幣商品として機能する。そしてすべての他商品はその価値を貨幣商品で表現（貨幣形態）し、「商品世界の統一的な相対的価値形態が、客観的固定性と一般的、社会的妥当性とを得」¹⁸²るのである。

以上、これまで考察したように、価値形態の展開が、価値概念と価値の表現形態〔定在様式〕との矛盾を原動力とするものであり、その矛盾は貨幣形態において究極的に解決されているのである。

- (1) マルクス『資本論』初版 二三頁。
- (2) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 67.
- (3) マルクス『資本論』初版 七十六頁。
- (4) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 69.
- (5) (6) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 67.
- (8) (9) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 68.
- (10) (11) (12) (13) (14) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 69.
- (15) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 70.
- (16) K. Marx, *Das Kapital*, a. a. O., S. 71.
- (17) マルクス『資本論』初版 七八二頁。
- (18) マルクス 同書 二七頁。
- (19) マルクス 同書 二六頁。
- (20) マルクス 同書 七十九頁。
- (21) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 75.

643

価値表現の分極性

一七三

阪南論集 第四卷

一七四

644

むすび

われわれは、これまで価値表現の両極がいかなる関係にあるのか、を考察してきた。そして明らかとなったことは、第一に両極が相互に依存し、補足しあう関係、反省関係にあるということであった。だから、両極は発展の原動力である矛盾ではけっしてない。

さらに、第二にわれわれは両極をヘーゲルの解釈する説を検討した。その説はヘーゲルの『論理学』の「本質論」の区別の諸規定を、何ら批判的に検討することなく、そのまま両極の關係に援用したものであった。だからヘーゲルにおける思惟と存在、認識と具体的事物との区別のつかない誤りがそのままち込まれている。

最後に、われわれは、両極が相関関係であり、矛盾するものでないとすれば、一体、価値形態を展開させる原動力はなにに求めるべきであろうかを検討した。それは、商品世界における社会的な単位である価値の概念とその表現形態との矛盾、つまり概念と定在様式の矛盾、に求めるべきであるということであった。

以上がわれわれの明らかにしたかった点である。

(一九七一年九月一六日)